

經堂の内側に一室がある。中に日本人がいる。裸体でカタ衣を装い机に向かっている。これは東京目白新長谷寺の釈迦然という僧で、修行のために来ているのだという。同氏に面会し、その案内でスマンガラ僧正に面会した。僧正は歳は五十余り、色が黒く、背丈は五尺ばかり。同じく裸体にカタ衣をかけ、長い寝椅子に寄り掛かって、家の庇のような所の土間にいた。

少し話をしてる内に食事の時間となったので、僧正は中に入って行った。印度の規則で十二時に食事をしなければ、後で食事をすることができないため、いかなる用事があつても必ず十二時に食事をすためだといふ。僧正の傍らには二人の印度僧がいた。その後講堂を見物したが、中にはタラ葉に書いた經文が多く、日本の經文もあつた。印度には未だに活版術がないため、みな書写したものだといふ。興然僧も土地語の經文を写していた。土地語の經文をタラ葉に書いたものを一葉いたたく。

訳すと、諸悪莫作 衆善奉行 自淨己意 是諸仏教  
この他に日本から修行に来ている者が四五人いるといふ。皆近辺に下宿しているといふ。

興然僧が言うには、当地は九十五度以上の温度に上がることは決してなく、また常に暑いため、日本にいるときの大暑よりはかえつて凌ぎやすいといふ。また、当地は昨日が元旦で今日は第二日といふ。

土人は大抵裸で、日本の婦人の用いる腰巻一つを用い、各男女とも陰部を隠している。位の高い紳士令嬢と言われるものが、ようやくこの腰巻の上に白の半シャツ一枚を着るに過ぎない。皆裸足である。色は男女とも真っ黒で、日本で四月八日に甘茶をかける釈迦像〔黒い像〕はまったく印度人の像である。

途上、土人の子供が馬車の前後に来て錢を貰いに来る。また杖や花の束を売ろうとして大変うるさい。花は人民に反して美しく良い香りを放っている。家屋は小さく、土を積み上げた上に椰子の葉で屋根を葺いている。風窓の少ないのは驚く。屋内や床はなく土間で、板の棚の上に寝る。水道が至る所に通じているのは感心する。島内には湖水が多く、景色のよ

いところが多い。椰子の木は大きな林をなして、ほとんど全島を覆うようである。椰子はこの一種類をもつて、土人の用いる衣食住の一切のものを作る大変重要な樹木で、椰子の木の数によって貧富を分けるという程である。

椰子に次いで多いのが芭蕉である。これもまた衣食住に大切なものである。私もこの実が大変おいしく、船中でも大抵毎日食べている。この他マング、パインアップルなどの果実は大変甘みを含んでおり、このような物を天然自然に料理できると思えば、誠に熱帯地方が羨ましいのだが、土人の様子を見ていると呆然としてしまう。

島の周囲には鉄道があり、交通が便利である。それから、海岸のグラウンドホテルで昼食をとる。同所は日本の大磯のような所で、景色が大変素晴らし。帰途、博物館を見学する。中には六間程のフカや巨大な鯨の骨があつた。当地は象牙細工の有名なところで、一行の中にはこれを買いたい者もいた。六時半に帰船する。七時に出港。

金二十錢 上下ハシケ賃 金六十錢 興然僧に  
金一円五十錢 昼食 金一円五十錢 馬車代  
金八十錢 案内者に

#### ●第二十三日目

四月十四日 月曜日 快晴 最高温度九十四度(撰氏三十四・四度)  
午前六時起床。波が静かで地上のようである。フカが水面に群躍している。

#### ●第二十四日目

四月十五日 火曜日 快晴 最高温度九十二度(撰氏三十三・三度)  
海上は極めて平穏である。この暑さに加えて波が荒ければ苦しきは堪え難いであろうが、誠に都合がよい。

(●第二十五日目)

四月十六日 水曜日 快晴 最高温度八十六度(摂氏三十・〇度)  
午前七時起床。波は極めて穏やかである。

(●第二十六日目)

四月十七日 木曜日 快晴 最高温度九十二度(摂氏三十三・三度)  
波が穏やかなので入浴した。大抵毎日入湯できる立派な湯殿である。

(●第二十七日目)

四月十八日 金曜日 曇天 最高温度八十六度(摂氏三十・〇度)  
十二時にスマトラの群島の内、兄弟島というものを左方に見る。数日目で陸を見る。皆喜ぶ。

(●第二十八日目)

四月十九日 土曜日 快晴 最高温度九十二度(摂氏三十三・三度)  
今夜アデンに到着するため、第四回の報告を認め郵便に投じた。  
船中では暑い日には氷が出るため大変よい。また美味しい果物があるため大いに食事が進む。ビールやラムネなど何でも命じた通りに持って来てくれる。近頃は万事に慣れたので都合がよい。外国人だということも忘れて、仏人の歌がちょうど学校の友人の「月落ち、鳥鳴いて：」のように聞こえるのがおかしい。

初めの内は何だか決まり悪く、洋人の誰かが聞き耳を立てているようで失敗も多かった。例えば、勝島君は寝台の上にある小便壺に時計や懐中を入れ、草刈氏は雪隠で日本風に用を足そうとしたら、船が揺れたため前に転落した、など面白かった。その他、目の前にいる洋人の悪口を日本語という暗号を用いて、大きな声で言うなど随分とおかしいことがあった。

船客はおよそ二百五十人程である。いつもはこの様に大人数のことにはないようだが、ちょうど気候が良いのと船が立派なこともあって大勢乗っているという。何も彼も都合のよい時なので、誠に有り難いという他ない。

それに荷物もこの船の会社がベルリンまで届けてくれるので、昨日当用の物を除いて大きいトランクに入れ、受取りを貰って預けて置いた。

アデンからはスエズ、ポートサイド、アレキサンドリア、マルセイユという順であるが、途中の諸港はみな一寸立ち寄って郵便を出すだけだという。今月三十日には、マルセイユに着く予定だという。アデンからマルセイユまでは二千九百六十三里のみである。

私の航海中の有様はこのようなものである。安心されることを祈る。

(明治)二十三年三月十九日 紅海に於いて 静六再拜

本多御両親様 御元へ

御両親様はじめ皆様ご自愛くださるようお祈り申し上げます。また御親類皆様、朋友諸君にも宜しくお伝えくださるようお願い申し上げます。

洋行日誌 第五報 亜典(アデン)よりスエズに至る

(●第二十八日続き・四月十九日・土曜日)

四月十九日、午後九時頃から亜典の灯台が見え始めた。乗客は皆久し振りに陸地を見たので、喜んで甲板に上がっていた。しばらくして山脈が見えた。しかし曇っているので、余りよく見えない。時折灯台の電光が見えると、皆が喜んだ。

うきふしのしげき波路にやどる夜はいなづまの間も陸をしぞ思ふ

十二時に亜典に到着。碇を降ろす。市街は山の後部にあるので、船からは見えない。五里あるという。長い期間停泊する船は市街の近くに回り込むようであるが、この船は明朝七時に出航するため、ここに止まったのだという。そのため一行は皆上陸することができない。石炭を積み込む音が喧しいのは困り果てたという。私は着後熟睡したので知らなかった。

(●第二十九日目)

四月二十日 日曜日 快晴 最高温度九十四度(摂氏三十四・四度)  
午前六時起床。直ちに甲板に上がる。例のアフリカクロンボが群がって来て、だちょうの卵や羽、写真などを売り付けている。また小船で乗り付けた黒人は、銭を海中に投げよう催促し、投げれば巧みにこれを拾ってくる。まるでカッパと同じである(これは前の諸港にもあった)。衣服はセーロンと同じ様にユモチ一つである。望遠鏡で東方を見ると、アラビアの突端に禿山が見える。その禿山の内部には一面溜水が池をなしており、用水に使われているという。山腹に十数の家が見える。民家と思われ、草葺きで軒がある。日本の民家によく似ている。望遠鏡を西方に一転すると、即ちアフリカ州で、広大な砂山が限りなく続くサハラの大砂漠が見える。時々駄鳥や駱駝が群れをなして、この砂山を駆けて行くのを見るところ。海岸の近くにある小山も砂岩である。炎熱がこれを焦がし、草も生じさせないのだ。恐ろしいところである。  
午後から紅海に入る。これから船は常に北西に向かう。既に北緯十四度に至っているものの、砂漠から熱風が吹き寄せるため寒暖計は九十四度半となっている。意外である。

(●第三十日目)

四月二十一日 月曜日 快晴 最高温度九十度(摂氏三十二・二度)  
午後から風が吹いて大変涼しくなった。黄色い海草が浮いているのが見える。これまでの航海中、海草を見るのは初めてである。鳶のような鳥が飛んできて帆柱に止まる。この辺は地図では一条の川のようにあるが、兩岸を見ると思いのほか漠々とした大海である。  
ながめやる方こそなけれ和田の原見ゆるかぎりは波ばかりにして胃の消化作用が大いに強くなった。食事の時間が待ち遠しく、大いに美味しく食べられる。これは海上のよい空気を呼吸しているからで、皆健康になるという。海浴場のようなものだろうか。

(●第三十一日目)

四月二十二日 火曜日 快晴 最高温度八十五度(摂氏二十九・四度)  
午前六時起床。北風が来て大変涼しい。半分冬服に変える。自ら髭を剃る。何回かやっているの得上手になった。少しも切ることはない。昨日、給仕に金を遣わして、これまで取り寄せた食物の勘定を精算した。

(●第三十二日目)

四月二十三日 水曜日 快晴 最高温度八十二度(摂氏二十七・七度)  
午前六時起床。午後からスエズ湾の入り口に近付き、左方に砂山を見る。未だ草木のある山を見ない。これから先はスエズ湾で、今夜十二時頃にスエズに到着するという。このため午後からこの日誌を認めて郵函に投じた。スエズからマルセイユまでは千六百五十五里あり、この船は一時間に平均十四里進むため、今日から一週間後には仏国に着く訳である。この船は速度が速いため、しばしば他の汽船を追い越す。今日も二隻を追い越した。未だに追い越されたことはない。愉快である。  
航海に慣れた人の話によると、今回の航海くらい楽なことはないという。誠に有り難いことである。我々の航路も最早終りを告げようとしている。つまりこのような状態でおります。お幸せを祈ります。  
思ひやる都の春の花盛千里の波を枕にぞして

(●第三十二日目)

四月二十三日 水曜日 最高温度八十九度(摂氏三十一・六度)

午後、紅海の入口で三隻の沈没船を見る。この辺は砂山の小島が多く、ややもすると浅洲に乗り上げ沈没するという。この辺は勿論、東はアラビア、西はアフリカ州の砂漠で、勇猛な土人は台風の後などには海辺を探し歩いて、沈没船があればこれを奪い去り、人は殺してしまうという。沈没した船の帆柱をみて恐ろしくなったが、近頃は灯台を各難所に新設したため、決して沈没するようなことはなくなったという。

午後三時頃有名なモーゼの登ったシナイスの山頂を認める。夜の二時にスエズに到着。私は睡眠中のため気付かなかつたが、一時間程休み、二三の旅客を乗せて直ちに起航したという。

(●第三十三日目)

四月二十四日 木曜日 快晴 最高温度六十九度(摂氏二十・六度)

午後五時起床。甲板に上ると船は既に一小溝にあつた。溝は有名なスエズの堀割で、サハラとアフリカの間にある砂漠を掘って紅海と地中海とを結んだもので、なかなか立派でしかも大工事である。

幅は三十間ばかりで、大船は待ち合わせなければ行き違いすることはできない。所々にステーションがあつて、あたかも鉄道のように記標を掲げ、電信があり衝突を防いでいる。しかし我々の船はほとんど川幅一杯なため、普通の速力では水を押上げ、兩岸の砂を崩すため、一時間に五里の速力で進んだ。堀割の長さは八十七里。幸い中央に二つの沼があつて、これを連絡させたので大変都合のよいものであつたらしい。兩岸はそれほど高くはないが、砂漠のため樹木は少しも生えていない。ただ所々に僅かに灌木があるだけである。

岸に柳を植え、または柵を設けて崩壊を防いでいる所もある。しかし幸いなのは、上部は飛ぶような砂であるが、下層は粘土となつて固い所が多い。これがこの工事を成功させた一大原因であろうか。

我々の船が水中に入っている部分は常に二丈余りなので、三十間の幅に足らないこの溝に船を進めるのを考えれば、余程深い堀である。

掘割ができた時に見物した人の話によると、次のようである。兩岸に掘り上げた土砂は直ぐに堀を埋めるので、絶えず人夫を使つてさらい取る。また掘り上げた砂を遠方に運ぶため、多くの駱駝を使った様子はまさに奇観であつたと。つまり蛇のような長い首を上げて、光つた背に二つの箱を背負い、土取り場に着くと直ちに四足を折つて座り土を箱に盛らせ、一杯になれば直ちに起きて六七歳の子供に導かれ、坂道を行列していく様子は大変面白かつた。

船が通行するときは、土人の子供は兩岸に沿つて船を追い、土産を買うようせがむ。

この溝に入つてからは大変氣候が涼しくなり、樹木のある場所も少し見えるようになってきた。溝の中では各船が極大の光力を発する電気灯を船首に点灯させるため、夜中でも白昼のようで白い波が良くわかる。砂原に映る様子はあたかも白雪のようで、例のとおりこじつけて、

ふみの道開くるほどもしらゆきの姿を見するアフリカの原

十一時頃にポートサイドに到着。一時間ほど休んで直ちに起航する。スエズは紅海の終りで、ポートサイドは地中海への出口である。人口は一万七千人という。

(●第三十四日目)

四月二十五日 金曜日 快晴

午前七時起床。午後一時アレキサンドリアに到着。ここは今ドミニカ領にあり、古代から開けていたところである。ここはアフリカ州エジプトの一部であるが、地中海を隔てて欧州に対して貿易を行つており繁盛している。

一時半にはしけを使って上陸。馬車を雇つて市内を見物する。ポンペー、ピラストを見る。このピラストは花崗岩一箇で造られた高さ百四十尺の塔で、古代の大事業の一つと称されている。それより墓地を見物して午後四

時に帰船する。四時に出航のため、大変忙しく一部を見ただけである。市街は煉瓦造りの高樓で屋根の無い家が多く、また壊れかけた家などもあつてとうてい古都の有様とはいえない。特に海岸の砲台は、先年英国人に打ち壊されたままで哀れな有様である。

中央には立派なところもあつた。奇怪なことは、婦人が頭から下部まで黒い布を被り、目だけ出していることである。そのうえ花の上には妙な竹筒のようなものを載せ、少しも顔を見せないことである。この地の土人は猛悍なところがあり、帰りのほしけを本船に付けず、途中で錢をむさぼり、打とうとするやと權で抵抗し、ほとんどお客が被害に会うという評判で、船の役人にも注されていたが、幸に無事であつた。

船は四時に出航。地中海に入る。

(●第三十五日目)

四月二十六日 土曜日 快晴 最高温度六十八度(摂氏二十度)  
無事

(●第三十六日目)

四月二十七日 日曜日 快晴 最高温度六十四度(摂氏十七・八度)  
夕刻から夜に入つて雨があつた。大変寒くなり、外套を用いるようになった。

(●第三十七日目)

四月二十八日 月曜日 快晴  
午前三時頃、帆船の沈没しているものがあり、一時進行を止めたが、何事もなかつたことは幸いである。

(●第三十八日目)

四月二十九日 火曜日 快晴 最高温度五十六度(摂氏十三・三度)  
午前六時起床。この日は少し風があり、波が高く航海中最も激しかった。

波煙が甲板に上がるほどであつたが、船旅に慣れた私の体は一向に平気で例のとおり大食を成したのには大いに称賛を得た。船酔いしている人が多くいたためである。

午後四時に仏国の連山を認める。乗客は皆喜びを隠さない。九時に無事マルセイユ港に到着。直ちに上陸。グラントホテルに宿泊する。ホテルは立派な造りである。しかし欧州の立派なことは、予期していたことなので驚く程ではなかつた。

これまで認め置いた手紙は、来客のため投函するのが遅れているうち、ついに四月三十日六時の汽車で、翌五月一日パリに到着。一日と今日の二日見物したため、パリまでの日誌を記さなければならぬところだが、四日にマルセイユから日本に向けて出航する船があるので、ここまですべて、次報に詳記することにした。

明三日、午前八時の汽車にてベルリンに向かう予定である。ここからはドイツ語になるため大安心。また大変元氣なので、ご安心ください。

明治二十三年五月二日 巴里にて 静六拜  
本多御両親様 并に辱知諸君

洋行日誌 第七報 ターラント安着

(●第三十九日目)  
四月三十日 水曜日

午前六時起床。市内を見物し、午後六時三十五分発の急行の上等汽車で、勝島、草刈両氏と私の三名のみで巴里に向かって出発する。池田少佐がステーションまで見送りに来られ、荷物等の周旋をしてくれた。これから池田氏その他の諸君は、明朝の汽車でリオンへ行き、それから巴里に向かう。

て行くため、私たちと別れた。

直に車中は夜になったため、特に記すことはない。ただ汽車には便所がついており、非常の場合には汽車を止めるネチがある。また、冬期は室内を暖かくするネチもあつて便利である。

(●第四十日目)

五月一日 木曜日 快晴

汽車が揺れるので、安眠することができなかつた。五時頃に目が覚める。暫くして太陽が平林の上に登り、日光が緑葉を照らす。五葉松、白樺、柏、赤松等の混交林が整頓している。農場に黄金を敷いたような菜の花。涓々たる水辺の牧場は、三十八日間大洋に風波を堪え忍んだ旅客の目に、いかに嬉しく感じるか、文章で表わすことができない。いわんや殖産経済の有様を目撃しようとする他に用のない旅客は、例えば水かきのない動物のようなものである。

私が初めてこの陸地にあることは、海上において実に徒然に苦しんだのも、今は目の前に広がる所、すべて私の見ようとする所であり、積日の志望がここにその端を開き、勇氣百倍、面白いことは言うまでもない。

間もなく汽車は世界第一の都巴里府に到着。時に時計の針は九時十五分であつた。直ちに馬車を命じて、宿泊所へ向かう。この家は日本人の定宿で、福富幸臨氏がいて種々の周旋を受けた。同氏は米國に留學後、帰朝の途であるという。

同行三人、着後馬車を命じて市内を見物し、午後また馬車を命じて市内を見物する。巴里が夜に入つて一行が驚いたのは、市街が広くかつ繁華であるよりも、むしろ人民が懦弱なことである。

市民はみな黒のシリントルの高帽を被り、白の新しきシャツを着込んで、悠々として闊歩し、未だ朝なのに無数に並んだコーヒー店でビールを傾け、密かにポケットから鏡を出して衣装を直し常に持ち歩く、はげで髭を直すなど、男子としては酸鼻に堪えないところである。しかも市街の商店は、服屋、帽子屋、時計屋、シャツ屋、小間物屋、コーヒー店などで、その他

生産事業に携わるものは探そうとしてもない。要するに奢侈に供する物品の市場というべきである。諺にいわく、巴里人は裸で外套を着る、と。その外観を装う様子で知ることができる。

以上は悪口的一端であるが、有名なエッヘル塔、パノラマ〔見せ物〕公園、動物園などが多くあり、かつ規模の広大なのは賞賛するに余りある。一例を挙げれば、動物園内に馬車鉄道が通っていることなど、その広大さを知ることができよう。

思うに巴里は決して書生もしくは生産を目的とする貧乏人の行くべき所ではない。金持ちが遊びに来るところである。遊ぶ道具が備わっていることは比類ない。金が幾らあつても消費に困らない所である。私たちの長く止まる所でないと言ふ。一人も働いている人を見ないようである。

(●第四十一日目)

五月二日 金曜日 快晴

この日も三人同じく公使館へ行き、また市内を見物した。第六報を出す。

(●第四十二日目)

五月三日 土曜日 快晴

午前八時十五分の汽車で勝島君と共に、伯林(ベルリン)に向かつて出発する。巴里にての支払いは、

十五フランク 蠟燭四本と朝食三人分

十六フランク 葡萄酒一瓶、コーヒー、ビール三本

二十七・五フランク 晩飯三人分

七フランク ラムネ二本

八フランク 午前の馬車

八フランク 午後の馬車

六フランク 部屋代

右は三人支払い高

百〇五フランク 巴里よりケルン迄の上等、ケルンよりセルン迄の中

等汽車代

三フランク 菓子代

十四フランク 荷物運賃

右は私一人分

車中から山野を見て、気分が壮快になった。巴里のような腐敗した空気の中から脱出したためである。

車中で高橋建造氏が同じ列車に乗り合わせていることを知り、同じ車両に移る。同氏は随行員と共に四名である。ケルンで三十分間休み、税関の検査を受け、昼食してまた乗車する。今度は独乙の汽車である。

これより我々は、切符を中等から上等に買い替えた。高橋君ら四人は別の車両で、他はすべて国人である。

今度の車両は大変都合よくできており、食べ物を買うことも、ビールを買うこともできる。独乙の汽車は大変上等にできている。ただ悪口を言わざるを得ないのは、ビスマルク然とした車掌が、一マルクの金で機嫌をとることである。欧州に来て、現金に効能があるのには実に驚いた。

(●第四十三日目)

五月四日 日曜日 快晴

午前七時四十一分、ベルリン府フリードリヒ町のステーションに到着。

奈良原繁の子息、奈良原竹熊君が迎えに来た。馬車に乗って宿舎へ向かう。

この家は日本人が多く下宿する宿屋で、すでに日本人が四名いた。祖根君

(富田商会会員)、奈良原君に案内をもらい市内を見物する。伯林は巴里に比べれば総じて質朴の趣がある。仏国人が田舎者というのも無理もない。

巴里にいては我々のような者は、自分ながら衣服がみすばらしく感じ、昼間は歩きにくかったが、伯林ではさほど気にならない。

広大なステーションが幾つもある交通は大変便利である。

(●第四十四日目)

五月五日 月曜日 快晴

本日もまた市内を見物し、公使館に行き西園寺公使に面会し、また園芸博覧会、動物園などを見る。日本で聞いたのとは違い、気候は大変宜しく毎日快晴で、日本の六月初旬の気候である。夜は聡明な月を頂き、樹木鬱蒼、散歩によい。ただ馬糞の堆積する臭気には閉口する、否閉鼻せざるを得ない。日本の人力の数倍はある馬車のことゆえ、毎夜市内を清掃してもたちまち馬糞の山を築いてしまう。また、巴里も当所も共に地獄者(売春婦)が多いため、危険も甚だしく嘆かわしばかりである。

しかし感心なのは、ドイツの大学生の品行の良いことである。その代わりいざとなつたら、決闘をする。大抵の書生は一二の傷を持っている。しかしむやみに乱暴な訳ではなく、礼儀を尊び、我々に対しては大変丁寧である。ただ恥を重く思うため決闘を行うのである。日本の書生は決闘を行わないためかどうか、皆大抵地獄買(買春)をして、新しい客に対しては地獄の話をするという。日本人の面汚しである。このような高尚な志望のない下等留学生は、公使館の権力で日本に追い返すことが望ましいものである。しかし中には品行もよく学問のできる留学生もいるということである。日本の学生はおよそ五十人程当府に在るといふ。

(●第四十五日目)

五月六日 火曜日 快晴

ベルリンの空気も半ば腐敗したようなものである。長く止まるべき地ではないと思ひ、早く出発するため、マルセイユで汽車に預けた荷物を受取りに行った。そこで税関のやかましいのには驚いた。つまりいかに小さい荷物であっても全て切り解かれ、絹類はみな税を取られた。以後荷物を他国に託する人は、決して紙の糊付けなどしないほうがよい。直ぐに解けるように荷造りすることである。

この日は多忙のため検査が終わるまで待てないので、明日の約束をして帰った。

(●第四十六日目)

五月七日 水曜日 快晴

この日ようやく荷物を受け取ることができた。しかしこれだけ堅固と思っていたトランクの所々が壊れているのには驚いた。  
午後から大久保学而氏を訪問した。

(●第四十七日目)

五月八日 木曜日 快晴

午前八時発の急行中等汽車で、勝島、祖根君に送られてターラントに向けて出発した。奈良原君も見送りに来てくれた。十一時十一分、ドレスデンに到着。十二時まで待つターラント行き汽車に乗り換え、十二時三十分にはターラントに到着した。  
ベルリンでの支払い

十マルク 宿料及び朝食代 四十マルク 食料並びにビール代

十四マルク ドレスデンまでの中等汽車

七マルク 荷物代

七十ペンニツヒ ドレスデンよりターラントまでの汽車賃

二マルク 車掌に遣わす

二マルク 宿屋の下女に遣わす

ターラントに到着後、荷物はステーションに預けたまま、直ちに志賀(泰山)先生からの手紙(紹介状)を持ってドクトルシミット氏へ面会に行き、同氏の隣室に下宿することが決まった。荷物を取り寄せ、衣服を改めて一安心。この家は以前志賀先生が住んでいた場所で大変綺麗にできている。十五畳位はある。机や椅子は大変立派なもので、二階が住居となっている。寝室は隣にあり、私の行く学校は隣にある。そのため部屋からは園を隔てて講堂が見える。

この家はクルゲという料理屋で、学校の教師や学生らが来る所で、その二階が私の下宿する部屋である。

ドクトルシミット氏は親切に世話をしてくれ、一緒に食事や散歩をした。

(●第四十八日目)

五月九日 金曜日 曇天 気候温和

午前六時起床。十一時からドクトルシミット氏の案内で学校へ行き、教授らに面会し、入校の手続きを行った。世界的にも有名な森林学者の泰斗ユータイヒ氏にも面会した。入校の手続きはすべて完了した。  
明日は午前六時より、ライプツヒヒという所まで、同校長並びに諸教授、学生らと共に、修学旅行に行くことになっている。

ターラントは人口二千人足らずの小さな市であるが、日本の王子滝の河のような所で、ドレスデンのあるザクセン王国の王都ともいえるところである。ちょうど東京に位置するようなものである。そのため、ドレスデンはベルリン次いで大きい都市だが、当所は一番景色のよい聖なる地である。市の中央には石川が流れ、市内は山麓に沿い、人民は質朴にして温厚、少しも浮わつたところがなく、まったく私の嗜好に適したところである。市内を散歩すると、先方から「おはよう」とか「今日は」という挨拶を受ける。

森林の学生は七十人程いる。いずれも二十歳以上の人で、学生風の活発、温良な性格で衣服などにも頓着せず、皆喜んで私を迎えてくれた。

山水が自然とそうさせるのか、要するに誠に良き風俗の所である。樹木も多く四面が山林のため景色も良い。人数が少ないので散歩にも好都合である。今は林檎や梨が花盛りで、タンポポ等の草花も多い。綺麗な道を散歩して目に入るものは、青や緑のないものではなく健康にも大変よいところである。夏になると諸国から避暑客が訪れるという。

この学校は半年か一年で卒業できる見込みのため、その後ミュンヘンの大学に入るつもりである。

ここは、必ず私の健康に適し、体は太るだろう。その代わり一挙一動が市民の口上がり、今日はどんな風をして、どんな所にいたか。ただ一人珍しい他国人なので、食事をするにも皆が見ており、婦人などは密かに木の影に隠れて覗くものもある。少しも悪い挙動をすることもできず、はなはだキュー屈である。しかし体のためにはいいことなので、有り難く思っ



ているところである。

市民が親切なこと、私がステーションから出てくると直ちに案内して私を学校の方へ導くなど、すべて斯くのごとくである。

私は明日は修学旅行に行き、明後日は日曜日。翌十二日から学校に行く予定である。気候もよく、住むところもよいので、体はすこぶる健康である。今日からは規則正しく勉強をし、日本の林学士の力を知らしめることを望んでいる。ああ、指折り数えれば、我が家を出てから四十七日、初めて目的の地に達した。その目的の地に達した喜びと同時に、我が慈愛なる両親、最愛なる妻子、親切な親族知友諸君はつつがなきや、私はそれを知りたい。願わくば、手紙をお送り頂きその安否を知らせていただきたい。二十三年五月九日　ターラントに於いて　本多静六再拜

### 洋行日誌 第八報

(●第四十八日目・続き)

五月九日 金曜日 曇天

昨夜認めたベルリンの勝島君あての手紙を出す。また日誌第七報を東京に向けて出す。その後衣服を改めて、午前十時学校へ出掛け書記に面会して入校の手続きを行った。それから校長のユードイヒ氏に面会、握手の礼を行い、入校式が行われ学生の証票が付与された。

ユードイヒ氏は、歳は六十歳前後で、温厚な語り口で話をされた。同氏は実に世界森林学の王と称せられる人で、ザクセン皇帝からも特別な優待を受けており、同皇帝の枢密顧問官の一人であることから、校長とは呼ばず、枢密顧問ユードイヒと呼んでいる。

また同時に校則及び日課表を受けとる。明日修学旅行に参加するよう告

げられる。午後から洗濯等を出し、荷物を片付け、大変気が楽になった。午後十時就寝。

(●第四十九日目)

五月十日 土曜日 快晴

午前五時起床。サンドイッチを新聞紙に包んだものを、宿の老婦の心遣いにより携帯し、四丁程先にあるステーションへ行き、校長らと待ち合わせする。この間体重を計る。十ペンニツピを投ずると自動に計れるようになっていいる。衣服を着けたままで五十六キログラム、つまり凡そ十四貫九百目である。一か月毎にここに来て体重を計ってみるつもりである。必ず月々に増えるであろう。

この時すでに学生凡そ五十名、校長及び教授二名、大林区長一名が集まり、汽車の往復切符を買って乗り込んだ。校長らは上等席であるが、学生は皆下等席である。しかし日本の中等より少し悪い位である。

フライベルク近辺の山林を巡回し、セムツセラタイヒという池の辺りに到着した。人足の一人がすでに大きなビール樽を持ち込んでいるのを見れば、ここが昼食の場所と思った。そうしたところ、各々が大きなコップを片手に持ち、ビールを鯨飲しパンをかじるのであった。私も一杯傾け大いによい心持ちとなった。他の学生の中には五盃から七、八盃は飲む者がいた。

ここは景色もよく二時間ほど休憩した。一人の教師が写真を撮り、私もよく写ったが、売り物ではないので日本へ送ることもできず残念である。それからまた山林を巡回し、五時頃フライベルクに帰る。フライベルクは繁華な一大都市で、ターラントから日本の五里ほど離れているだろうか。有名な鉱山学校があると、日本の学生も五名いる。校長のユードイヒ氏は私の心中を察し、大林区長に命じて日本人に面会させてくれた。

こうして山田文太郎、向井某、的場某の三名に面会してビールを飲むことができた。向井氏は大迫尚道氏（ベルリンで面会した人）から既に紹介状があつて知っていたので、皆々たいへん喜んで、明日は日本料理を作る

から泊まつて行けと勧められたが、大林区長は私を伴つて帰ることを校長から託されているので、泊まることもできないので九時半まで遊び、皆にステーションまで送られて、九時半の汽車で、十一時半に無事ターラントに帰った。汽車では一時間なので、また明日来るようにといわれたが、到着して早々なので、万事多用をもって明日日本料理を馳走になりに行くことは断つて、他日を約束して帰った。直ちにぐたびれて寝につく。

(●第五十日目)

五月十一日 日曜日 快晴

天気爽快。景色もよい。朝食後、宿の後の山の頂上にある教会(イハレゲリス)に因らずも友人に誘われて行ったところ、大変大きな教会があった。男女数百名がいたが静粛で、音楽に合わせて賛美する歌はよく分かり、語学の稽古にもなる。しかも私が教会へ行くと市民が喜んでくれるので、日曜には行くことにした。出口伯母様からいただいたバイブルを使うことになった。深く感謝するところである。

十一時、教会から帰りベルリンにいる大迫君に礼状を出す。

昼食後シミット(ドクトルで助教)、ステットネル(本屋で市内の金持)及び林務官補の三名に誘われ山に登る。この山は山林が鬱蒼として、その間から市中を見下ろすことができ、景色の良いことはいまでもない。山の頂上には眺望台がある。樹木の頂上よりも高く、近隣の農場、山林を一目に眺めることができる。市中の男女老幼が多く散歩をしている。そこから頂上を南に行くこと数丁のところに有名なハインリッヒ・コッタ氏の墓がある。同氏は数学家で、後に山林学者となった人である。林学に大改良を加えた人で、この学校の前校長であったという。

それから更に林中を歩くこと半里程のところにハルタ村がある。空气清新高爽の地である。ターラントからこの辺の村にかけては、春夏の頃は大都府からも散歩に来るところであるという。

二盃のビールを傾け暫時休憩。帰りがけアルベルトサロンで市民の舞踏を見る。アルベルトサロンは、ザクセン皇帝の定宿で大きな舞踏場がある。

日曜ごとに市民男女が組み合つて踊る所であるという。奇怪なことには、この国の人は日曜には必ずよい衣服を着け、老幼男女皆が出歩くことである。途中どこも賑やかで、日本のお祭りの帰り道(ただし田舎)というような風情で、このサロンにも大勢の人が集まつて舞踏をしていた。私たちはここで夕食をとつた。九時二十分に帰り、寝に就く。

(●第五十一日目)

五月十二日 月曜日 快晴 相変わらず温和な気候である。

午前五時起床。八時から初めて稽古(授業)に出て、十一時に終わる。池田氏に書状を出す。礼状である。

午後三時から教授のイマイステルと一里程の所に散歩に行き、六時に帰宅。夕食後シミット氏他二名と散歩し、七時過ぎに帰つて寝に就く。

(●第五十二日目)

五月十三日 火曜日 快晴

午前六時起床。七時に学校へ行く。九時の寒暖計は七十九度(摂氏二十六・一度)である。午後から島村氏に手紙を出す。

夕食後、また数名と散歩する。帰宅後、シミット氏に日本から携えて来た種物を分け与える。同氏は大いに喜んで硝子管に納めた。八時頃に宿の老婆が来る。絵紙三枚を与える。大いに喜ぶ。この日菓子を買つて帰る。十時寝に就く。

(●第五十三日目)

五月十四日 水曜日 雨天

午前六時二十分起床。七時から十二時まで学校に行く。下女に扇子一本を遣わす。大いに喜ぶ。

この日校長に贈呈する種物四十七種の箱の裏書きを行い、また木材標本五種の箱にも次のように大書した。

「明治二十三年五月八日、日本帝国の林学士本多静六独乙国に來り。」